



三毛猫  
次郎の短い一日



次の日は昨夜夜更けまで行動しておった為に、少し寝坊してしもうたんじゃ。この日からは母上の情報と共に、「守り神」様についても尋ねて回ることにした。じゃが、どちらの情報もつかめなかった。

数週間経過したある日じゃ。

わしらはいつものように搜索活動をしておった。

道を進んでおると何やら前方に見えてきたんじゃ。遠くから見ると黒猫集団がゴミを漁っているように見えた。何よりもその数の多さに驚かされたわ。

と、黒猫、飛び跳ねたと思うたら高く舞い上がって電線の上へと行きおった。鳥じゃった。わしらは何ら怯まず道を通ったんじゃ。



じゃが奴ら黒鳥がカーカーしわがれた声でうるさいんじゃよ。こちらを睨み付けておるのが分かったわ。

すると電線の上におった黒鳥の内の一羽が急降下して来おったと思うたら、わしの耳スレスレに飛んで再び舞い上がったんじゃ。

それが合図だったのか続け様に黒鳥の連中が、わしと小次郎目掛けて急降下して来おった。どれも避けるのは簡単じゃったが身を低くしていなければならんからの、前へ進めなくなってしもうたんじゃ。

何もゴミを奪い漁る気はこちらには無いのに勘違いされておる様子じゃった。

説明したかったんじゃが鳥どもの言葉が分からんから困ってしもうたわ。

埒があかんから仕方無しに争わなあかんと思っでの、反撃に出たんじゃ。

じゃが急降下して来てはまた舞い上がるからの、なかなか思ったようには反撃できないのじゃよ。

これには心底困ってしもうての。

じゃから別にお主らの物を奪う気は無いと言い続けとった。

すると不思議と攻撃が止んだんじゃ。

心は通じるもんじゃなと思っておったら黒鳥の内の一羽が、ゴミ山の上へ舞い降りて来てわしらの言葉を話し出すから魂げてしもうたわい。

その者、わしはこの近辺一帯を任されておるカラス族の倉吉じゃと名乗った。

この倉吉、まずはわしらに攻撃を仕掛けたことを詫びてきた。

わしは今でも倉吉のことを忘れてはおらん。倉吉は礼に始まり礼に終わる、そんな言葉がピッタリの男じゃよ。

倉吉はまだ若く、体格が大きく物静かで一番綺麗じゃった。

それは黒では無いんじゃ。日の光によって紫にも濃い青にも変化するんじゃよ。

この倉吉が言うには先の不良猫との争いで、次期の親玉と有望されみなからも慕われておった若者が命を落としたらしいんじゃ。

またその時一緒にその若者のことを慕っておった子供達三羽も命を落としたらしい。じゃからわしら猫に対して敵対心が強いらしいんじゃ。

わしは猫としてその不良猫のしたことを詫びた。

じゃがこの時わしは一番驚かされたんじゃが、倉吉は同志を四羽失っているのにも関わらず、詫びる必要は無いと言うんじゃ。

先の争いで同志の命を奪ったのはわしでは無いと言うし、その争いは致し方無かったもので、同志が命を落としたこともそれは名誉だったと言う。

わしはこの倉吉のことを猫と鳥の違いはあれ種族を越えて尊敬出来るんじゃよ。

それにしても倉吉の率いるカラス族が、なぜゴミを漁って食い繋いでおるのか不思議に思うて尋ねてみたんじゃ。

すると単純な答えが返ってきおった。

それがカラス族の生き残る術だと。

実に分かりやすい話じゃった。

わしらのような猫は人間に食いを貰って生きておる者も多いが、カラス族にとってはそれはとても難しいということじゃった。

カラス族は野良猫よりも人間に嫌われておることを自覚しておるそうじゃ。

厳しい現実じゃの。

この倉吉はなかなか賢く生きておる。

しかもわしらの言葉の他に、犬の言葉と人間の言葉も一部分かると言うておった。

倉吉ならもしかしたら、母上のことや「守り神」様についても知っておるかも知れぬと思うて尋ねてみた。

すると倉吉から「守り神」様について重要な情報を得られたんじゃ。

何でも空を飛んでいる時に、倉吉が「守り神」様らしき御方を見たらしいんじゃよ。

「守り神」様、何と人間の御婆様と一緒に暮らしておると言う話じゃった。

その場所はここからさほど遠くないと言うのですぐに行ってみることにしたんじゃ。

倉吉と別れそこへ向かう途中、わしらは馬鹿でかい大きな水溜りに出くわした。

これは小次郎が知っておって、兄上これは「池」と言うんですぞと教えてくれたわ。

この「池」の中には色取り取りの魚がおった。パクパク口を開いておったわい。

綺麗な花が池から伸びており咲いておった。

石の上にはノソノソ動きの遅い者がおって、気持ち良さそうにしとったわい。

人間もちらほらとおった。

上手い言葉は浮かばぬ。

じゃがきっと、これを「共存」だと言うのではなかろうか。

ここに争いの匂いは感じなかった。

先の倉吉のカラス族一派についての話が何だか理由も分からず身にしみたわい。

この池さへ抜ければ「守り神」様までもう少しじゃ。

そう思うて足早に「池」を後にしたんじゃ。

すると今度は道端で、赤毛の子猫がグーグー寝とったではないか。  
わしは何を寝とる、風邪をこじらすぞと起こしてやったんじゃ。

そうしておると小次郎が後ろから、兄上、兄上と何度も呼んできおった。  
余りにもしつこくに呼んでくるからの、何じゃ言うて振り返ると小次郎がただ下を向いて座っておった。

どうしたんじゃ、腹でも痛くなったのか言うて少し心配したんじゃが、違う言う。  
一体何じゃ、どうしたんじゃ、何ごとじゃ言うたら死んどりますとポツリと言うた。

まさかと思って子猫を見返したんじゃが確かに死んでおった。  
何くわぬ顔をしておったから、初め死んどるとは夢にも思わなかったんじゃ。

一体なぜこんな道端で眠る様に死んでおったのか見当もつかぬ。  
小次郎にも尋ねてみたが小次郎も見当がつきませんと言うた。

これが「守り神」様の力なんじゃろうか。  
つまり命や知恵も授けてくれるが、同時に命も奪うのかも知れぬ。  
そう、その時は思ったんじゃ。



それにしても子猫の命を奪うとは、余りにも無慈悲じゃなかろうか。  
わしは少し戸惑っておったわ。  
わしらはその子猫に花を手向けて、「守り神」様の所へと先を急いだんじゃよ。

暫く歩いてのう、いよいよわしらは「守り神」様の元へと辿り着いたんじゃ。  
人間の家の中には確かに色取り取りの食い物が並べられておった。  
虎次郎が言うておった通りじゃった。猫世界の「守り神」様はさすが人間からも尊敬の念を集めており、御供え物が多く捧げられておるようじゃった。

「守り神」様は前方を直視されたまま、優しい笑顔を浮かべておられ座っていらっしやうった。わしの三倍ぐらいの体格の良さじゃった。



わしと小次郎は「守り神」様のことを直視してはならんと、頭を下げたまま前へ進み出たんじゃ。

ま、「守り神」様。

何じゃ、という御返事を期待しておったんじゃが、一向に御返答して下さらぬ。まさか、先程の子猫に対するわしらの行いを怒っていらっしやるのかと思った。思えば無慈悲じゃったかのう、もう少し亡くなった子猫の為に何かしてやれたかも知れぬ。わしは「守り神」様なら母上のことを教えて下さるという期待のあまり、子猫の死に直面しても少ししか悲しまず、自分のことばかり考えておったんじゃ。

わしは自分のことが恥ずかしゅうて恥ずかしゅうて、仕方無かったわい。暫く間があったんじゃ。

「守り神」様は一向に御返答下さらぬ。わしは思い切って事情を話し母上のことを御伺いしてみることにしたんじゃ。

「守り神」様、恐れながら申し上げます。わしは、いえ、私は、雨の降りしきる日に気が付いた時には高架下の段ボールの中におり、恥ずかしながら、母上とはぐれてしまいました。以来ずっとこちらにおります小次郎と一緒に、母上を捜索して参りましたが、いまだ重要な情報は得られておりません。

強いては何がしか「守り神」様が知っていらっしやるのではないかと思い、伺った次第であります。何卒、宜しくお願いします。

と、大きな声で言うた。

しかし「守り神」様またしても何も御返答下さらなかった。

わしは必死に自分がしてきた行いを省みた。

思えばわしは喧嘩も多くしてきたし、いわゆる善良な行いを一つでもしてきたじゃろうか、そう考えておった。

わしはずっと下を向いておったが、隣で小次郎が「守り神」様のことをチラリと見ようとしたから、ピシャッと小次郎をたしなめた。

じゃがわしもちょっと気になってチラッと前を見ると、「守り神」様変わらぬお優しい御顔で座っていらっしゃった。

わしは目線を下げる時に見てしもうたんじゃが、「守り神」様キラキラ黄金に輝く大きな煎餅を左手に持っており、右手は天高くお上げなさっておった。

わしらは五分ほどそのままの姿勢で、「守り神」様の有り難き御言葉を待ち詫びておった。その時耳には聞こえぬが、心の中に「守り神」様の有り難き御言葉が聞こえたように思われたんじゃ。小次郎にも聞こえたらしくこちらをチラリと見てきおった。じゃがその御言葉とてもショッキングなものじゃったよ。

な、何とわしの母上は既に他界しておると仰ったんじゃ。

「守り神」様が仰るにはわしの母上、わしと違って飼猫だったそうじゃ。その母上、わしを生んでくれた後に体が衰弱し、十五年間の短い猫生を閉じたそうじゃよ。

加えて「守り神」様はわしの本当の出生についても教えて下さったんじゃ。母上の死後、わしと一緒に生まれた兄弟は別々にされ、人間に貰われたそうじゃ。

じゃがわしだけつまり、残ったんじゃな。

わしは段ボールに寝ている間に詰め込まれ、高架下に捨てられたということじゃ。その後のことは御主の知っての通りじゃよ。

わしはこれらを聞いて小次郎の前でもショックを隠し切れなかったんじゃ。

わしが母上の顔も知らない内に母上は他界してしもうていたし、しかも自分は人間に捨てられた身だったんじゃよ。

隣から小次郎に御礼を言うように促されて何とか、有難うございました、心のもやがようやく晴れましたと御礼を申し上げることができたんじゃ。

何分間そのままの姿勢でおったんじゃろうかのう。

小次郎も気を遣ってくれての、何も言わずそのままの姿勢でそばにおったわい。

すると前方からゴニョゴニョ人間の声がしてきおっての、見ると倉吉が話しておった人間の御婆様がこちらに近付いて来ておったんじゃ。

この御婆様、綺麗な白髪で体は小さく腰は曲がっておった。

わしはこのお婆様に捕まって気が遠くなっていったんじゃ。

気が付くと太陽が傾いて夕日になっておった。

周りをキョロキョロ見回すと、小次郎が何食わぬ顔でミカンをパクパク食ったんじゃ。

はて、ここは天国か地獄か。

わしはキョトンと声も出さずにそのままの姿勢で寝転がっておった。

すると後ろの引き戸がおもむろ開いて、御婆様が部屋へ入って来たもんじゃから現実世界へ連れ戻された。

御婆様はとても柔和な御顔をしていらっしゃた。

御婆様が何やら喋り掛けてきて、ニコッと笑いながらわしの身体を綺麗なタオルで拭いて下さってのう。

続いて小次郎と同じ様にミカンの皮を剥いて下さって、わしに与えて下さったんじゃ。

そのミカン、実はあまり美味くはなかったんじゃが、何よりも御婆様の優しい御心遣いが嬉しかったから、わしは無我夢中になって食ったんじゃ。

御婆様が何やら優しい御声でわしらに向かって話し掛けておった。  
前方を見ると先程の「守り神」様の御背中が見えておったわ。

と、途端に騒々しくなったんじゃ。

人間の男の子三人、女の子二人、合わせて五人の子供達が御婆様の家の中へ入り込んで来たんじゃよ。この子供達、「守り神」様の御供え物を物色し始めたんじゃ。  
わしはそれをただ許して見ておった。

すると子供達、御供え物を御婆様の所へ一つ二つそれぞれ持って来たかと思うと、あの与っさんも大切にしておるキラキラしたものを手渡したんじゃよ。  
じゃが代わりに御婆様は、子供達に手渡された数より多くお返しなされた。  
何て心が広いんじゃろうか。

次に子供達は御婆様の周りに集まって来て、「守り神」様の御供え物を食べ始めたんじゃ。袋の中からは随分とカラフルな食べ物が出て来おったわ。  
一見、毒が入っている様にも見えただのう。  
しかし子供達はいたって美味そうに食べておったわい。  
それを見ておる御婆様がまたお優しい笑顔を浮かべておった。

子供の内の一人の女の子がわしの背中の中のハートを指差して何やら言い出しての、そうしてわしのことを抱き上げたんじゃ。

次からが大変じゃった。

わしも小次郎も子供達に足やら耳やら尻尾やら髭を、引っ張られるは引っ張られるは。  
生きた心地がせんかったわい。  
じゃが最後には御婆様が子供達をたしなめたように治まった。

その後、暫く子供達は御婆様と話しておったがやがて帰路に着いて行った。

御婆様は子供達のことを家の前まで出て見送っておったわい。

そして「守り神」様のことを台車に乗せたまま、ガラガラと家の中へ招き入れて下さったんじゃ。

その時わしは気付かされたんじゃ。

猫世界の「守り神」様の伝説は、実はこの御婆様のことを言っているんじゃないかなろうかと。

この御婆様はわしらの様な野良猫も大切に下さるし、人間の子供達のこと大切にしておった。「守り神」様のことも綺麗な布切れで御顔や御身体をお拭き下さった。

そうして御供え物を綺麗に並べ直して下さるのである。

わしはこの御婆様に人間の言葉で御礼を申し上げたかったんじゃが、無論、わしは人間の言葉は話せぬ。じゃからずっと猫の言葉で御礼を言い続けておったんじゃ。

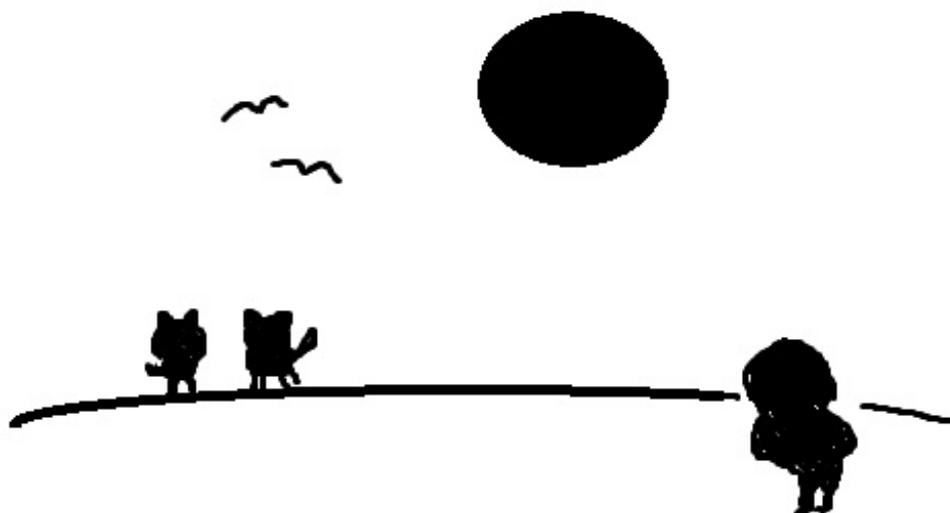
すると思いは届く、のかも知れぬ。

又は勘違いかも知れぬが、御婆様が頷いて下さった様に見えたんじゃ。

御婆様がわしらに何やら話し掛けておった。

暫くして、わしらは御婆様の家を後にしたじゃ。

夕日が沈む中で御婆様が、いつまでもわしらのことを見守って下さっているのが見えておった……。



「三毛猫次郎の短い一日（3巻）」

おしまい